

右弘・亀井俊介・小堀桂一郎 編

東西文明圏と文学

東京大学出版会

1974年2月10日 初版発行

小堀桂一郎

東京都文京区本郷 東大構内・電話 (811) 8814・振替東京 59964

3390-84260-5149

講座比較文学 6

東西文明圏と文学

目次

I 文明圏と文学

ギリシア文学の成立 呉 茂 一 三

イスラエル伝承文学 並 木 浩 一 二五

——アブラハム伝承の展開——

インドの説話 田 中 於 菟 彌 五

ビザンチン文明の意味 森 安 達 也 七

氷の交易 クサヴィエ・ド・プラノール 九

——地中海および中東における雪の交易——

吟遊詩人とアラビア文化 前 嶋 信 次 二五

——アンダルシアとプロヴァンス——

東の橋と西のオレンジ 平 川 祐 弘 二七

——文学的感受性の伝播のあとをたどって——

ピューリタニズムとフロンティア精神 本 間 長 世 二八

——アメリカの独自性の追求——

II 東西の相互認識

大航海時代を通じての東洋認識……………	増田義郎 二〇七
中国における最初のヨーロッパ観……………	岡本サエ 二二七

III 東方へのまなざし

『西東詩集』の世界……………	菊池栄一 二五二
トランセンデンタリストと東洋……………	滝田佳子 二九七
——ソローを中心に——	
ラフカディオ・ハーンと日本の心……………	森亮 三一九
クローデルと日本……………	渡辺守章 三三三
——自然ならびに空無の詩法をめぐって——	
ニーチェにおける脱ヨーロッパの思想……………	水上英廣 三六三

あとがき

執筆者紹介

I

文明圏と文学

ギリシア文学の成立

呉 茂 一

一 神話と伝説

ギリシア文学を語るときに、その神話伝説を除外することはできない。それはたんにアリストテレースが『詩学』⁽¹⁾の中で悲劇の題材をもっぱら古来の伝説に求めさせ、すぐれた悲劇はごく少数の限られた家系の伝説に取材したものとするに止まらず、ほとんどすべての文学様式を通じて、これと関連をもたないものはない、といっても過言ではない。

しかしここに「神話」と呼んだ本来の *mythologia* (γ) は、新しい訳語であって、原語の *mythos* にはすこしも「神」という概念は含まれていない、狭義の場合でもせいぜい「作り話」(『オデュッセイア』一一・四九二などのごとく)⁽²⁾で、ヘーロドトスでも伝説というに近く、元来はただの「話」か「ことば」としてホメーロスにも常用されている。それゆえ原義としてはとくに伝説とことわるに及ばないが、邦訳を独立して考慮するとき、神話はもっぱら

神格の介在を意味すべきであるから、伝説と加えるほうが適當であろう。

それならばギリシアの神話はいかにして成り立ったか、その神々の本質は、というと、これはもとより複雑かつ困難な課題ではあるが、多くの神話学者宗教学者の解明を集約すれば、大方はギリシア民族の南下移住と、その *subject* をなす先住民族古来の信仰、神話伝説や、周辺諸民族からの影響に分けて考えることができよう。そのうちにつき、古典時代（前五、四世紀）の信仰を規準とすれば、本来のインド・ゲルマン的要素は意外に少ないごとくで、むしろ南下移住以後の変化や推移に著しいものが見られ、いわゆるオリュンポスの十二柱の神々⁽⁵⁾中にも、純粹にかくと認められるのはゼウスのほかはヘステイアーだけで、そのヘステイアーさえやがては斥けられディオニューソスと入れ換わった。

ここでそれらの神々の成り立ちを一々弁別するのは適當でないが、約言すると、女神の多くは先住諸民族の諸地方における大地母神、主女神に由来し、男神はまたおおむね大地女神に関連する穀霊ないしは植物の精霊から、またその變形である豐饒神、地下神に出て、しばしば大地女神の配偶者、愛人、あるいは時にこれと別ちがたい子神であることが見出される。たとえばアポロンの原形は（北方要素を除けば）小アジア系の植物や牧畜や豐饒やの司神で春と光明とにかかわるが、その母は小アジア地方の大地女神と推定されるレートー（古形はラートー、ラーダーなるべく、各地にその社殿があった）といわれ、同母姉妹とされるアルタミス（アルタミス）は豐饒と安産の守護女神として小アジアのエベソスに大神殿を有していた。また古くはボセイドーンはデーメーテール（すなわち大地母神^{メーテル}ダア）の夫であったに違いなく、その間の娘コレーはおそらく穀霊で、ある期間地下に埋れる運命にあった。同じくディオニューソス⁽⁶⁾もブリュギア系の大地母神セメレー（ゼモラー、大地）とゼウスとの息子とされる。

すでに上記からも窺えるように、外国から渡来したものと古くから認められていた神格もはなはだ多い。ディオニ

ユーソスが古典時代に大体トラキア・リュディア系（パッコスの名称）とされていたほか、軍神アレウスもトラキア系としてホメーロスでは冷遇を受け、アプロディーテも厚遇されていない、そこではもうオリュンポス一家の一員と認められてはいるが、かつてキュプロス島を仲介にシリア（セム系）方面から渡来したアシュタルト（アスタルテ）の変形である痕跡は内密に残されていた。さらに二級神に至っては出所不明のものが多く、純粹の民間信仰から成り上がった、あるいは自然現象、心理的なものの形象化、なども他民族以上に数多く認められている。こうした有史前のギリシア宗教、信仰にもとづく神格や靈物、伝説や記述には、解明したい（臆測のほか）分子がなお多にあるのは、多くの民族の交叉混淆が激しかったギリシア自体の立地条件からしても当然であろう。

ギリシア神話が体系として大体の構成を見たのは、ホメーロスととりわけヘーシオドスの詩篇を基礎として前八世紀（推定）以降、前五、四世紀の古典文学全盛期を頂上とし、体系的にはもうローマ時代に入る紀元前後ではあるが、その核をなすオリュンポスの神々などゼウス一家一族の形成は上記のように後ミューケーナイ期に遡るとされなければならない。これが同時に英雄詩の形成発展期なのは当然ともいえることで、われわれは叙事詩人によってその大体の結果を告げられているものである。

ミューケーナイ時代の実情は、現在にはなはだ不完全な記録（ミューケーナイ、ピュロス、クノーソス出土のB型線文字文書により、疑義もしばしば挿みえるところの）と考古学的資料によるほか何らの文献をもたず、多く知ることができない。しかしピュロス文書には、住民からもっとも厚い信仰を受けていたと覺しいポセイドーン（ポセイドン）のほかは、ゼウス（らしい）、アテーネー、さらにディオニューソス、ヘーラーの名も窺われ、後代では他の神格に併されたエニウアリオス（アレウスへ）、パイエーオーン（アポローンへ）、イーピメデア（デーメーテルと同じか）、ヘルメスなども祭られたと見える。多くの古典学者とりわけニルソン（8）なども主張するように、これらの信仰体系がさらに拡

充され、ついにゼウスを中心とする家長制のようなものにまで生長したのは、後ミューケーナイ期で、この形勢はギリシア神話伝説の集中する地点が、かつてのミューケーナイ文化の中心地、アルゴス地方、テーバイ、オルコメノス、アテーナイ、西ではカリュドーン附近、北はテッサリアの諸邑、とりわけイオールコス、南はペロポネネーソスの古い町々、ことに西南のピュロスなどであることによって、十分に証明されていよう。

ここで十分な省察を要求されるのはこれらの神話、神格の形成、伝説の展開が外来の影響よりも、むしろギリシア文化自体の内蔵する要因によっている事実であろう。すなわち個々の神格や祭儀やあるいは由緒伝説等々ははじめは外来の要素を上記のように含んでおり、比較神話学や民俗学などによって解明されるところも多いが、いったんギリシア文化自体の発展過程に入つては、その旺盛な創造形成の力によっていわば独自の、スポンタニな展開にまつところがあるかに大きく、かつ重要と認められるからである。それはまったくギリシア文学そのものの成立や展開が、以下に述べるように外的な影響よりも（他民族からという意味）、内的な要因によって動きかつ変転していったと考えられるのと同じである。

ギリシアの神話伝説はいかにも無尽蔵とも見える素材をその文学に提供した。また実際に、ギリシアの詩人（ギリシア語では作家、作家^{ποιητής}である）は、彼らが有する神話伝説の可能性を深く掘り下げ、人間性の奥秘にまで到達しようとした。あるいは少なくとも時代を超えて現代に迫り、時には現代をすら凌ごうとする、たとえばオイディプス劇や、婦人問題を含むエウリーピデースの『メーデア』⁽⁹⁾、一方ではデーモクリトスの原子説、アリストアルコスの地動説などのごとくに。

そのようにギリシア文学一般、ことに通念に変化を求める悲劇の構成（それへ後代の伝説がさらに補足を加える）では、種々な工夫が作者によって案出され、特異な語り口が地方伝説や類似の説話から取り入れられて、全然趣きを

異にする転向が遂行される。『タウロイ人の間におけるイーピゲネイア』（*Epigeneia he en Taurois*）あるいは同人作の『アンティゴネー』（そこではアンティゴネーが田舎へ逃れて生活し子を設ける）などは完全な詩人の作為である。なおこのイーピゲネイアのように、多少とも類似点をもつ神格が容易にギリシア神界に同化されたり（一種の垂迹、あるいは権現思想ともいえる）、または反対に他民族、ことに被征服種族の神格が下級女神や人間の女（男）と見做されて神話伝説の構成に役立てられる場合もきわめて多い。

アリアドネー、カリスト、イーピゲネイア、レーダーあるいはヒュアキントス（ヒヤシンスの由来）、アドニスなどみなこの類いで、トロイア戦役の誘因であるヘレネーも元来は樹木や鳥に縁のある女神たる要素を持つ。ギリシア文学がこれらの多趣多様な神話伝説によって豊富にされ多彩を加えたことは他に類例を見ないほどであった。

二 叙事詩について（一）

——口誦詩の伝統と『イーリアス』——

ホメーロスの作と伝えられる『イーリアス』と『オデュッセイア』の両叙事詩篇は西洋文学の最初の作品とされ、全世界としても完全な形態を保持する点では（つまり断片的な制作を除くと）最古であって、しかも高度な芸術性と完成度を保つものとしてひろく認められている。しかしこれが現代における一般の文芸作品と同じような創作過程によるのではなく、単一な、いわゆる「作者」の手になるのではなくてきわめて複雑な成立をもつことは、すでに早くから認識され、ことにヴォルフ（Wolf, Friedrich August, 1759-1824）が *Prolegomena ad Homerum* (1795) でこの両詩がもと口誦によること、書写の際に多分な改訂を受けたこと、作者が単一でないこと等を主張するに及び、古典学界に大々的な紛争を巻き起こした。すなわちホメーロス問題で、これ以後、単一作者論者と複数更訂追加説とが入り

乱れて未だに決着を見ない。

ことに口誦詩の実態をまったく知らず、近代文学の創作過程に馴れた西欧の学徒は、口誦詩といっても容易に想像がつかずに、どうしても知らず知らず通常の文学作品の概念で推す傾向があった。それがまず明瞭に認識されて来たのは本世紀の中頃近くアメリカのミルマン・バリー⁽¹⁾が、ユーゴスラヴィアなどで現代にも残存する口誦詩についての研究を発表してから後、しばらくしてバウラ教授⁽¹²⁾が口誦詩とホメーロスについての著述を出した頃からといっても過言ではあるまい。日本でも『平家物語』や『太平記』は措くとしても、『おもしろ草紙』、ことに『ユーカラ』のごとき好例があり、その研究の成果が待たれるものであるのは言うまでもない。

しかしそのいずれにしても、この両詩篇が以前に長年月の叙事詩成立の歴史を控えるものであることは、古くから十分に理解されていた。それならばこの叙事詩体というのはどういう風に、いつ頃出来あがったか、またこの両詩の内容とされるものは、何であり、どういう関係をその時代に対して持っていたか、ともかくもこれを作ったのは、どういふ詩人、または詩人たちか。簡単にしてもこれらについて若干の記述が必要とされよう。

先に記したように、この両詩篇はともに口誦詩として古くから祭典の場や饗宴などで詩人により口述朗誦されたものとされ、その実況はおそらく両詩、ことに『オデュッセイアー』⁽¹³⁾のうちに「作者」自身が物語るごとくであったろう。彼はまず大堅琴をとりあげて掻き鳴らし、それにつれて歌う(aeidein→aoidos 伶人、うたい手)のであった。しかし前古典時代ではすでにその風はすたれ、歌唱者もっぱら杖を執って声高く英雄詩や讃歌などを朗誦するだけであった。いわば琵琶歌と講釈師とを想起すれば足りるであらうか。

ホメーロスと名づけられた詩人については、古来いくつかの生伝が伝えられているが、そのいずれもが後代に属し、互いに矛盾もして信憑性を持ちえない。この両詩の用語から彼の生地をアイオリスとイオーニアの境界あたり、とり

わけスミュルナに定めようとの努力も、それがいわゆる叙事詩方言であって、けして日用語ではありえないので、安易に採ることは許されない。制作年代も両詩の内容をなす種々な言及から、およそ前八世紀の経過に属しその中葉あるいは末（ヘーシオドスとはほぼ同年代）とする説が有力である。

『イーリアス』も『オデュッセイア』も今述べたように「叙事詩方言」(epic dialect) と呼ばれる古形のイオニア方言を根幹とし、これにアイオリス方言などの要素を多分に加え、さらに若干の新しいアッティカ方言を交えた特殊な用語で作られてい、古くからの伝統的な使用が認められるもので、つまりは叙事詩自体の古い歴史を物語るに外ならない。ミューケーナイ文書（前十四世紀あるいは十二世紀初か）の解説（一九五三年）以来、その中のあるものに叙事詩中の古い語句やその格律すなわち長短々格六脚律 (dactylic hexameter) を思わせる行形が認められるとして、あるいは叙事詩形の起源を遠くミューケーナイ時代に求めようとする向きさえもあるが、それを別としても古代ギリシアの叙事詩文学が、ホメーロス以前に長い歴史と伝統を控えていることは、本詩を読もうとする学徒がただちに氣づくことであろう。

英雄詩律とも称されるこの詩形の起源については、これをギリシア民族以外にたずねようとする学者⁽¹⁾もないではない。それはホメーロスのうちに、この長短々格 (dactylus) の行使が必ずしも自由でなく、破格が時おり認められることから、古代ギリシア語そのものがこの詩格の十分かつ容易な使用に適していないと判断して、他の言語を用いた文学、他の種族の詩歌の影響下に、ギリシア民族がこの英雄詩律を採用するに至ったのである。

しかし実際において、そのように強力な詩歌ないしは文学の存在が想定されるであらうか。ギリシア民族が接触の可能性をもった種々な民族や言語のうちに、古代ギリシア語以上にこの格律に適當する言語があったであらうか、しかもそれほど大きな影響力を有するような。ホメーロスの両詩を検討する学徒は、それがきわめて緻密な句法や変化

によって構成されていることにただちに気づくであろう。それは口誦詩のならいに従い、きわめて多数の定句、詩形の各部に、情勢の微妙な差異に対処しえるような「定り文句」と多くの語形を貯えてもち、その自由な行使によって一方では誦出の円滑と、他方では表現の巧みとを確実にしてゆく。しかもいわゆるアイオリス方言形、語句の多くがこのうちに含まれていた。

さらにまた古代ギリシア語自体がきわめて多音節的でシラブルの数が多く（この点では日本語の古形とかなり似ている）、ことにホメーロス前期の母音融合以前の状態では短母音節に富み、ほとんどいづれの国語よりも長短々格の使用を容易とするのは、近代語たとえば英仏独などでこの英雄詩律をまねることの困難さ、不可能さと対比しても、ただちに諒解されるところである。同時にまた言語を素材とする芸術家である詩人は、石材や青銅や、絵の具とカンヴァスをもってする造型美術家と同じに、素材の抵抗を利用して、その困難を克服することによって、造形を遂行してゆくものに違いない。こうしてホメーロスは時に生ずる語形の拮据さ、多角さを利用して、律動の変化と多様性とを構成していったであろう、ことにそれが口誦詩であってみれば、なおさらのことである。彼以後のきわめて多様なギリシア詩形（それは現代詩、近代詩のとうてい夢想もしえないほどだが）をかえり見ても、この長短々格が随所に見出され、巧妙に処理されていて、他民族の詩形（ラテン語詩を含めて）のとうてい及ばないことを成しとげているのが知られる。

間河地方およびエジプトの文学（あるいはこれに類するもの）をたずねても、このように精緻な詩歌を見出すことは不可能である、ヘブライ民族はすぐれた歌謡をもつごくではあるが、その時代は大方についてホメーロスの古さに及ばないと推定される。形式についてはこのようではあるが、内容からしては如何、これらの点も確証が求めがたい以上、たんなる比較と類推の域を出ないであろう、例えばギルガメシュ⁽¹⁵⁾とその親友（はじめは敵手であるが）エン

ギドゥとの、ことに後者の戦死と冥界行きとの説話についても。しかし一般的にいつて、先進文学の影響が内容的にはかなりにあったと想定されるのは、後記のごとく『オデュッセイアー』や『神統記』において蓋然と考えられるので、ヒッタイト文学の欠落その他の悪条件下にも、ある程度の可能性は、すぐれた自^{スポンネイ}発性とともに、認めてよいであらう。

三 叙事詩について(二)

——『オデュッセイアー』とヘーシオドス——

『オデュッセイアー』が『イーリアス』と作者を異^ミにするとの見解は、早くアレクサンドリア時代の文献学徒、いわゆる分離学派^{ゴリソシマス}によって主張され、現代ではペイジ教授⁽¹⁶⁾などを先鋒とする。彼によれば『オデュッセイアー』はたんに年代で遅れるのみならず、語彙や句法やにおいても格段の差があり、作者が別人であるうえに、制作地、流派等も違うものと判断される。もちろん『イーリアス』はとりわけて旧くから伝えられた軍記もので、性格上も古めかしく騎士社会の伝統を堅持するものであったろうし、これに対して『オデュッセイアー』は多分に性質を異にする貿易商業従事者、新奇の開けた社会に眼を向ける人々を対象に含んでいるから、当然の相違が内容外形とも期待されよう。それにしても発想法にしても思想にしても、また詩術にしても、種々な隔たりが両者の間に認められるのは争われない。

『オデュッセイアー』の内容がたんにギリシア的というよりも、さらに全人類に共通な説話の世界に属することも人のよく知るところであらう。すなわちその前半は大まかに言って漂流綺譚であり、想像された奇怪な国々をめぐる冒険の連続である。また後半は不在良人のテーマを本とし、その間に妻子の受ける試練や良人が帰還しての復仇が主